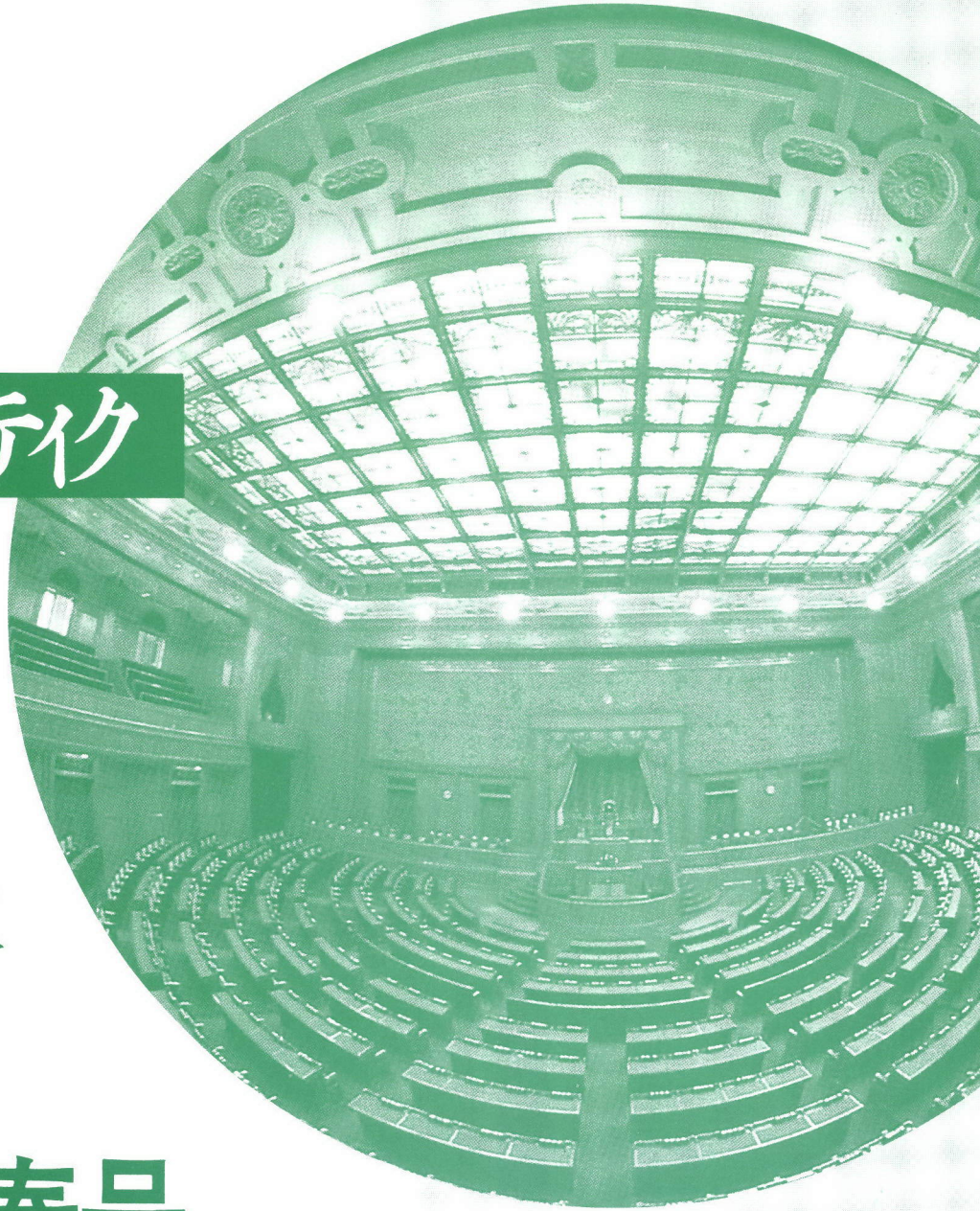


女だから、政治!

Femme

ファミ ポリテイク

Politique



1994年春号

泥にまみれた政治改革法案.....	2
国家的詐欺——年金のただ取り!.....	6
朗報・さらば、インフルエンザ予防注射.....	7
インタビュー・近藤隆行「国会議員の金あつめ」.....	8
女性議員のページ／小池百合子・中嶋里美.....	14
やさしい税金の話 庭山慶一郎.....	16
書評「小さくともキラリと光る国・日本」武村正義.....	18

CONTENTS

泥にまみれた 政治改革法案

踏みにじられた土井「幹旋」

参議院で否決され、両院協議会でも話しあいがつかず「政治改革法案」が廃案寸前に追い込まれたとき、土井たか子さんが「幹旋」を買って出た。あの「幹旋案」がいったい何だったのか、私たちにはさっぱり分からない。土井さんの真意はどこにあったのか。

「施行期日」の内容は、「施行期日」は「別に法律で定める」と改めて、法案は一応政府案のおり衆参両院で可決するものとし、また次期通常国会で政治改革に関する協議機関を作り、引き続き協議したうえで、改正などして

て施行期日を定める法律をつくる。これを両院協議会の申し合わせ事項とする。というものです。こう聞いただけでは、はっきりとした意味がつかめないのも無理はありませんよね。平たくいうと次のようなことな

日も決めなさい、ということなんです。こんなふうには施行期日を空白にして法律を通した例はこれまでにもいくつもあります。例えばGHQのもとで医薬分業の法律がつけられたときも、施行期日を何度も先送りにして、結局廃案にしてしま

た。だから「施行期日を空白にしておく」ということが廃案につながることも考えられなくはなかった。土井さんの真意がどこにあったのか、それは私にも分かりません。ただ土井さんに確かめてみたらば、彼女は「あれ

一月二十八日、細川・河野会談で決着のついた政治改革法案。その成立過程には、おかしな部分が多すぎる。参議院議員・大脇雅子さんに、隠された部分の絵ときをしてもらった。

は幹旋というより考え方を提示しただけのもの」といわれた。だがこの案が示されたとき公明党の市川さんが、「六十過ぎが女の知恵はこわい！」

と叫んだという。またある人は「これは事実上の廃案の提案だ」といったそうです。まあ、そういう可能性を含んだ案であったことは確かです。

首相は「法律」を「無視」できるのか

大脇 とまかく土井さんの案の骨子は、いまずぐ決めないで、国会の場で協議機関をつくり、じっくり議論してから決めよう、ということ。

されるわけですから、議会議民主主義としては筋が通っているわけです。しかし細川・河野の両首脳会談はまったく違うかたちで土井提案を利用してしまった。というより、提案はポケットにしまいこんで、中身まで踏み込んでことを決めてしまっ

議長が提案がこれほどまでにないがしろにされ、踏みこじられたことは、国会史上いまだかつてありません。

参議院が否決した法律案を、首相一人が、自民党というひとつだけの野党首と話しあって決める権利など、どこにもない。これは総理大臣の権限を越境していて、常識で考えたらおかしいでしょう。

だから私は、あれは議会制民主主義の「ハイジャック」だと思っています。

仮に百歩を譲って、両院協議会での議論の行きづまりを打開するため野党の話し合いを行うとしても、各党の責任者が当然、そこに参加しなければならぬ。しかしあの席には与党は小沢さん以外に誰一人いなかった。

その上首相は「行政府」の

マスコミは何をしているのか

不思議なのは、マスコミが首相の法律無視を一向に問題にしていないこと。いったいどうしてなのだろう。

大脇 私もね、議場から出てきてマスコミにインタビューされたとき、真っ先にこのやり方をおかしい、憲政史上悪い先例を残すというところをいって、何よりそこが肝心なところなのに、マスコミが取り上げようとしない。

代表。立法府である議会での細川さんは日本新党の代表ではあるけれど、与党全体の代表者とはなり得ないわけですから、どんな角度から見てもおかしい。

毎日新聞がすっぱぬいていましたが、総理・総裁合意のお膳立ては二十七日に、小沢・森会談ですでにでき上がった、と。そこへ土井「幹旋」が無い込んだので、タイムイングよくそれを利用しただけなんですよね。

土井幹旋がなくても、結局はあしたかたちで決着をつけたでしょう。

私たちが、土井さんの幹旋がからんでああい線が出た、などという錯覚をおこすのは、マスコミの報道がおかしいからなんです。

マスコミのいうことは「決着ついた、ついた」とか、「社会党の造反で、結局自民党案まるのみに終わったかたちをどう思いますか」とか、そればかり。

マスコミはほんとうなら国会の手続きを無視し、民主主義を踏みこじった二人のやり方を糾弾すべきなんです。それをしない。しようともしない。

国会というところにきてみて、ほんとうにおかしいと思うことの一つはね、国会での取材に雑誌社が全然入れないこと。大新聞の記者しか入れない。

そしてその人たちの取材のやりかたといえ、各政党のクラブがあって、誰々番、ということそれぞれ担当する政治家に密着取材する。

これ、全体が見えなくなるやり方なんです。

だから今度の政治改革の問題も、誰が造反して、どこについたとか、割れたとかそんなことばかり。国民のほんといに知りたいことを報道しないで、権力争いにばかり気をとられている。

私もね、永田町で権力の構造の中にあると、だんだんその構造の中でどう動くかというところにしか頭が働かなくなってくる自分が分かるんですよ。

だから新聞記者も、この構造の中にあると、「先生、造反の気持ち変わりませんか」とかそんなことばかり。そんなことよりも、この法律が国民の権利にどんな影響があるか、日本の民主政治の未来に何が起ころのかということこそ報道してほしい、と私はいい続けてきたのだけれども、特に番記者は、政治家に密着するから目が見えなくなる。



だからロッキード事件とか、大きな疑獄事件の摘発はいつも週刊誌から始まっているでしょ。週刊誌や雑誌がさんざん取り上げてから、ようやく新聞が動く、というかたち。

小選挙区制で腐敗はなくなるか

今回の政治改革法案でもっとも大切なのは、政治腐敗をなくするための政治資金規正法の改正にあつたはずである。改正によって、実際に腐敗はなくなるのだろうか。

大脇 政治資金規正法には三つの大きな抜け道ができています。

永田町の論理がいけない、ってマスコミは政治家をたたきけれども、実は自分たちマスコミの側もその論理にどっぷりつかっている。

まず一つは「ひもつき献金」。企業献金は、個人には禁止されているが、政治党に対しては禁止されていない。

で、例えば企業が「大脇先生にあげてください」と一億円持ってくるとする。すると党が、〇〇企業からきたから一億やるよ、と私にその金をくれる。これは今までもとら

れてきた手法なんです。

これを規制する方法はないかなと思って、一生懸命法律をしらべてみたりしたんだけど、これが、ない。

法制局の人も「金に色はついてないから、先生、無理だ」というんです。

党が私にくれた一億円が、企業が「大脇先生に」と持ってきた一億円かどうか、見分けがつかないわけです。色でもついていない限りね(笑)。消費税を導入したときと同じ。あのときもはじめ、福祉目的に使うようなことをほめかしていたでしょ。でも消費税でとった金が一般財源に入ってしまったら、これも色がついていないから何に使われたか分からない。あれと同じ。

もう一つは、政党の支部は企業献金を受け取れる。だから私の後援会をどこかの地区につくるとして、それを政党の支部ということにして金を受け取ればいい。

第三は、政治資金のやりとりが、支部や政治資金団体の

間では自由だということ。そうすると、金が還流して結局汚職の金も分からなくなってしまう。これもいままでと同じ。

確かに連座制の規制の幅は少し広がった。選挙違反などで有罪になった人には公民権停止も五年、となった。だけれども、裁判の判決が出るまで平均十年かかるんですよ！

議員の任期内に判決が出ないから、違反を問われても身分は安泰。判決がもっと早く出るようにしなければ、結局無意味なんです。

山花政治改革担当相も佐藤自治大臣も、「政党性善説に立ちます」という。

私は以前から、「組合内民主主義」をテーマに研究しているのだけれども、どんなに性善説に立つとしても、内部自治の規則はきちんとしてくられなければならない。自治には責任が伴う。

政治改革をなおざりにすると、政党法問題が浮上して政党への国家権力の介入がはじまる。この問題は深刻です。

青票を投じた決意の重さ

大脇さんは参議院で「政治改革法案」に青票を投じた議員の一人である。どれだけの重さがこの一票にこめられていたことか。

大脇 小選挙区制は、最初の中内閣のときに出してきましたよね。私はあれ以来、一貫してずーっと反対しつづけてきているんです。研究者としても反対署名をし、反対の論文も書いている。市民運動の一員として、宮沢内閣のとき、

雨の中で反対運動のデモを指揮したこともあります。だから「小選挙区・比例代表並立制」という私の考えは、もうずっとずっと前から、草の根の運動をするなかで培われてきたものだし、それに基づいて活動もしてきた。

あのとき、女性議員の間でも、青票か、白票かということとで一人一人がそれは悩んだ。最後に去就を決めたのは、やっぱりそれまでの自分の歩んできた道だったと思っただけです。

この制度は日本の民主政治を危うくするものですから、その意味で反対票を投ずるときは気持ちはずきりしていました。

今のように骨抜きにされた

「政治資金規正法」が「小選挙区比例代表並立制」と結びあつたらこれは恐ろしいことになる。

導入された小選挙区制というのは完全な政党政治です。無所属の政治家にはなれない。無所属の間は立候補が制約されてしまう。どんな人でも、政党のコントロールのもとでいか、政治家としてやっていけない。

その上今度、政党を対象に助成金が出るわけ。

この三つがコンバインしたら、政治家個人に対する党の支配力はすごいものになる。

単に理論的にみれば「小選挙区比例代表並立制」は、どの政党に特に有利だとか、必ずしも女が排除されてしまう、という制度ではない、とはいえます。それは有権者の「民意」に基づくことです。

でもね、この制度をいまの現実に適用した場合には、どうしても現職に有利になるし、女は出にくくなる。これは事実だと思えます。

それから、選挙を二回ほど重ねると「無風区」がたくさんできるでしょうね。最近の知事選でもそれが起こっているけれど、ある選挙区で、当

選者がまったく固まってしまつて対抗馬が出ない、という人たち。

ことに今度の制度は「比例代表併用制」でなく、「比例代表並立制」ですから、固定的性格に拍車がかかるでしょう(注・「併用制」は、小選挙区と比例区の候補者が別人。「並立制」は同一。「小選挙区」で落選した候補者を、「比例区」で救済するという意味が大きい)。

少数政党の存在は、大政党の腐敗をある程度防止してきたと思うし、草の根の少数者の意見を国会に反映することもある点ではできていたと思う。そういう仕組みがまったく崩されてしまうわけです。それに現在大政党となつていような政党でも、最初は少数政党から発足したと思うんですね。

そういう可能性を封殺して、政権の安定のために既存の大政党が有利なようにもつていく。それが今回の政治改革法案の目的です。

八〇年代に生まれた多様な、女性・環境・生活運動の草の根エネルギーが政治を変えよう、もう一つの新しい価値体系を創ろうとしているとき、その可能性をつぶしてしまつ。





え・西田淑子

**社会党の「造反議員」の青票が
細川総理を「自民党案まるのみ」
に追いこんだのか**

社会党「造反議員」が青票を投じたから、細川総理が自民党案を「まるのみ」にする羽目に追い込まれた、だから政治改革法案の「改悪」に責任のあるのは彼らなのだ。という論が横行している。

こうした論を信じ込む人々は、「強姦されるのは、される側に責任がある」と強姦犯人を無罪にする裁判官

や、エンジェル・ベビーを生んだお嫁さんを「こんな子を生んで！」と責め立てる姑などと同じく、真の責任者の所在を忘れて、目前にいる人間に責任を転嫁しているのだ。

社会党の「造反議員」の行ったことは、青票を投じ、その結果「政治改革法案」が参議院で否決されたという、それだけのことに過ぎない。

「自民党案を「まるのみ」

にして、法案を骨抜きにする決断を下した真の責任者は細川首相である。他の選択肢がなかったわけではない。国民の「政治改革法案」にかける期待は、何よりもまず「腐敗防止」の実現にあった。一月の半ばには、大新聞の中でもとりわけ保守的な日本経済新聞でさえ、政治改革法案のうち、「腐敗防止法案」を切り離して成立させるほうがよいのでは、という主張を行っていた。

こうした世論の盛り上がりにもかかわらず、「四法案一括成立」に固執したのは首相であり、自民党案の「まるのみ」は、首相の積極的意思があればこそ行われた、という事実を忘れてはならないだろう。

大脇 いろんなことをいう人がありますよ。一番あきれたのは、「お前たちのおかげで株が下がった」というハガキがきたこと（笑）。もちろん無記名でしたけどね。

地元では、私に議員をやめろという社会党の議員もいましたね。そうしたら私の友人たちが、地元で「大脇雅子の行動に共鳴し連帯する緊急集会」というのをやってくれて、ろくにPRもしないのに、二百人、あつという間に集まっ

た。

いま、青票を投じた仲間と一緒につくった「腐敗防止議員懇談会」で、政治腐敗をなくす目的で一つの新しい法律案の作成をほぼ終えました。

議員の「天の声」は、残念ながら幹旋収賄罪にはひっかからないんです。幹旋収賄罪というのは、職務権限を利用できる立場にある人間が、相手から金をもらった場合のみに成立する。ところが議員の「天の声」は多くの場合、相手に直接便宜をはかってやるポストとは関係ないわけ。

これを法的に取り締まるためには、国会議員等の幹旋利得行為を処罰する法律が必要なのです。

青票を投じた仲間たちも何人かいますけど、あのとときは、皆それぞれの人がそれぞれの立場で投票した。完全に同じ立場、同じ思想というわけではないのだけれど、ともかく「腐敗防止」だけはなんとしてもやっていかなければならない、という点では全員が一致しています。

でもそれも国民の支持がなくてはできないこと。

地元での会合のとき、最後に学生らしい若い男の子が立ち上がって、生協とか環境運動とか、いろいろなところで、いろんな人たちがそれぞれ行

動しているけれど、やはり最後は政治に行き着く、さまざま運動を「政治」に向けて結束して行くことが必要ではないか、と言っていました。とても嬉しかったですね。

こっこの委員会からあっちに移れとか、この会の代表をやめろとか、青票を投じた人になりたい有形・無形の圧力がいまかかっています。

私は社会党員ではなくて、最初から党議に拘束されない立場で議員になったので、そんなにひどい目にあってはいないけど、やりたいと思っていた仕事からはずされましたし、白票を投じた人から睨みつけられることもありますよ。でも気にしていません。こはゆずれない、という一線で自分の信念をおしたわけですから。

政治はある意味で妥協の産物だけれど、今回の法案は憲法の原型を決める次元のものでした。どうしてもゆずれない政治家の生命線というものがあると思います。

私にとって今回の問題は、その生命線の一つだったので。 まとめ・田中喜美子

おおわき まさこ

参議院議員・日本社会党・護憲民主連合

九二年参議院比例区初当選。

国家的詐欺 年金のただ取り!

年収が「100万円の壁」をわずかに越えているので、私は国民年金を払う主婦だ。それに加えて会社勤め8年間の厚生年金がある。厚生年金のある人には、ない人よりはましな老後生活が待つはず、と信じてきた。でも突然気づいた。夫が先に死ねば私の払った厚生年金は消えてしまうという事実。

今の年金制度では、夫が死ぬと妻は夫の厚生年金額の4分の3（遺族年金）か、本人の年金かのどちらかを選択させられる。大抵の場合本人の年金額より遺族年金の方が多い。

1月6日朝日新聞の声欄にも「どこへ消えた20年の年金」という投書があった。60歳まで勤め、払い続けた自分の年金をみすみす捨てると知り「国家的詐欺にあった思い」がしたという。同感だ。

団塊の世代の友人との茶のみ話には必ず老後、年金の話が出る。でも対応はバラバラ。シングルのTさん「子供がいらないし、厚生年金だけじゃ足りないから、かなり高い個人年金かけてる」。「年金制度は



払っている女
払えない立場の女
一緒に
制度の見直しを!

破綻するっていうから国民年金は払っていない。養老保険と介護保険でいく」と夫が自由業のSさん。「子どもには期待しない。夫がいなくなったら皆で一緒に住もう」とシニアハウス構想を打ち上げるPTA友達のIさんは、夫の遺族年金だけを当てにして自分では何も手を打っていない。第3号被保険者の「優遇」で年金支払を免除されているサラリーマンの妻の一人だ。

Iさんのような「主婦」は1200万人いるという。「おかしいと思わない?」「うーん」「優遇」されている主婦の反応は微妙だ。年金は払いたくない。でも厚生年金が掛け捨てになるのが変なのはわかる。「100万円の壁」が実際には女性の生き方を縛るオリになっていることにも気が始めている。

年金審議会の意見書が出て、マスコミは盛んに年金問題を取り上げたが、この問題についての論議は少ない。審議会にも女性はたった一人。

年金を払っている女と、「優遇」されて「払えない立場におかれている女」が、分断されることなく一緒に考えられるような「女性にとっての年金制度の見直し」の動きを作らなければ!

一口政治メモ 「党派」ってナニ?

新聞を読んでいると、「七政党一党派」などという言葉にとまどきでくわす。この「党派」の正体がよく分かっている人は少ないのではないだろうか。

「政党」も「党派」も、政治的集団であることに変わりはないが、「政党」は自治省にとどけて認定されるもの。しかし「党派」のほうは、立候補者が当選して国会議員になってから、それぞれの院の議長に届けでて結成する、国会内の集団である。

無所属の政治家は、どこにも属する集団がないから、国会内部では何かと歩がわるい。財政面でもまず「立法事務費」という国費がもらえない。

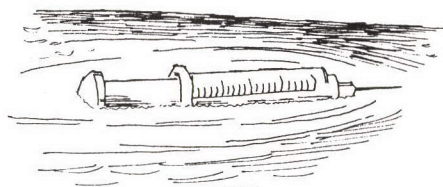
この「立法事務費」というやつ、これは「政党」または「党派」がもらえる無税の国費である。議員一人当たり月額六十五万円。百人の議員を擁する政党なら、それだけで年間七千八百万円。

そのためばかりとはいえないが、かくて無所属議員が数人集まって「二院クラブ」などを結成する、というわけである。

ついでにいうとこの「立法事務費」の存在こそ、いま問題になっている政党にたいする「助成金」の一種。実際、政治に関して私たちの知らないことは、いくらかもあるものですねえ!

さらば、インフルエンザ予防接種

今年の秋から、全国の小・中学校で行われていたインフルエンザ予防接種が消える。三十二年間、子どもたちに年二回行われていたこの「秋の行事」がなくなる背後に、どれだけの親たちの悪戦苦闘があったことか。



の壁であった。

「あなたみたいなきこをいってきた親は今まで一人もありませんよ。校医のこの手紙を見てみなさい。『予防接種をしなかったら、もっと大流行していただろう』と書いてあるじゃないですか」

東京・練馬区の小学生の母親、長戸かおるさんが校長室に呼ばれてつるしあげられたのは一九八五年の冬。

予防接種をしたというのに、子どもたちはつぎつぎインフルエンザで倒れる。「接種は本当に有効なんでしょうか」と養護の先生にぶつけた素朴な疑問に返ってきたのが、思いもかけぬ校長からの圧力だった。

学校のこのリアクションは即、小・中学校でのインフルエンザの強制予防接種に反対する親たちがぶつかった行政

インフルエンザ予防接種は、それまでも数々の犠牲者を生んでいく。接種の後遺症で寝たきりになってしまったわが子のために、宮城県の前橋市と、近隣の市との罹患率がほとんど変わらないというデータを世に出した一九八七年の医師会のレポートが、親たちにどれほどの自信を与えてくれたことか。

賢二さんが新聞投書をしたのが六〇年代の後半。「うちの子もひどい目にありました」と六十四の家族が被害者の会をつくったのは七〇年代である。

☆

インフルエンザが大流行した一九八五年は、運動の展開にとって画期的な年となった。静岡県鈴木美子さんが中心となって開かれた「どうする予防接種」全国シンポジウムに、接種に疑問を持つ親たちがはせ参じ、草の根の「予防接種を考える会」が各地に誕生した。「でも運動がほんとうに力を

持ったのは、前橋市の医師会のおかげです」その時から運動に参加した長戸さんはいく。接種をやめた前橋市と、近隣の市との罹患率がほとんど変わらないというデータを世に出した一九八七年の医師会のレポートが、親たちにどれほどの自信を与えてくれたことか。

☆

数々の犠牲者をだしながら、効きもしない予防接種を、厚生省はなかなかやめようとしなかった。

「もちろん接種が医師会のドル箱になっていたからです」長戸さんは静かに指摘する。前橋市の医師会は希有の存在。東京都の医師会ははじめ、多くの医師会は接種推進派にまわっていた。

それ以上に接種が「ドル箱」

となっていたのはもちろん葉品会社。インフルエンザだけでなく、義務づけられた「一斉接種」は、どれほどの利益をもたらすことか。

ほとんどに安全で必要な接種ならまだしも、いま横行しているのは「抱き合わせ商法」。「たとえば生後十八か月でさせられる百日ぜき、破傷風、ジフテリアの三種混合ワクチン、このうち、現時点でほんとうに必要なのは、破傷風だけではないでしょうか」と長戸さんはいう。

八九年に導入され、多くの犠牲者を出して四年後に中止された、お多福かせと風疹とハシカの予防接種もその一つ。かかって大したことなく、容易になおる病気がハシカと抱き合わせにされていた。

まして三歳から十二歳まで、

三十回前後繰り返されるインフルエンザの予防接種が製薬会社へもたらすメリットは計り知れない。

犠牲者が出て「特異体質」でかたづけられ、接種が国家政策として続けられていた背後に、どんな力が働いていたか、素人にも想像がつく。

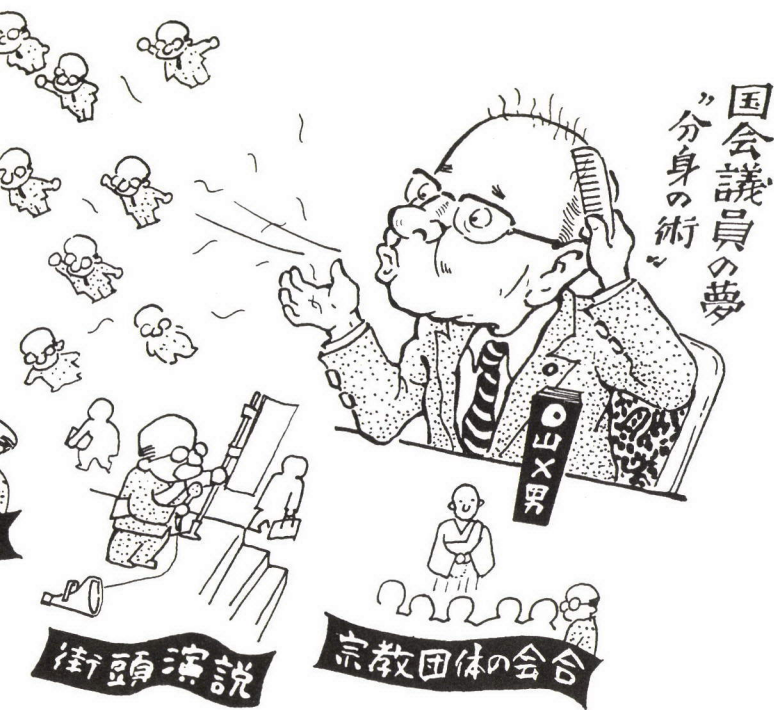
厚生省は一九八七年、ようやく重い腰をあげ、接種にあたって親の意志をきく「同意方式」に切り替えた。

この姑息さに怒った親たちが接種ポイコットを呼びかけ、接種率は二割以下に下落、ついに今年、全面的な中止を勝ち取った。

親の熱意が、ついに利益団体の圧力を乗り越えたのである。

国会議員の金あつめ

政治活動にどれだけ金がかかるのか？
金権政治の大御所、自民党にも「クリーン」な議員がいらないわけではない。その中の一人、元衆議院議員・厚生大臣森下元晴氏の第一秘書、近藤隆行さんに登場してもらった。



え・西田淑子

国会議員は行政官ではない

—国会議員になると、とにかく政治活動にお金がかかる。そのお金のかかり方を、われわれも取材して少しは知っているんですけど、まだまだ知らないことがたくさんあると思います。

なぜそんなにかかるのか、まずそこから話したいですか。
近藤 その質問にお答えする前にね、国会議員の使命から言わせてもらいます。

国会ってのはね、憲法にあるように「国権の最高機関である」。これがもう第一。国会は民衆、国民を代表する立法府であり、立法が義務なんです。しかも立法府は一カ所しかない。

これをどれだけの国会議員が心得ているか。日常の行動に生かしているか。国民もあんまり関知しない。なにか代議士を行政官みたいに間違えて考えている人が半分以上いると思う。

だから国会議員は行政に参画しないことが原則なんですけれども、

日本は議会が内閣を構成していますから、国会議員を一つの権力者であるかのごとく見ている。その行き違いが非常にある。スタートから間違っている。

—立法と行政を混同しているということとは、国会議員に、ここをこうしてほしいとか、ここに何をつくってほしいとか頼む、そういうことですか？

近藤 そう。それもあつし、指示権があるように思っている。それは官と議員が癒着しているからであつてね、みんなが根本原理を間違つて解釈してるんです。

—トランプが起こると議員へ頼みに行くでしょ。それがそもそも間違っている？

近藤 うん。頼めるような癒着状況になるから駄目なの。まあ、そういうようなことをお話しした上で、ご質問にお答えしたい。

日常生活にかかると膨大な金

近藤 政治家の金集めがなぜ必要か。一番大きな金がかかるのが政治活動。選挙運動ではございませ



ん。

政治活動で自分の持論を言わな
いかん。あるいは党の政策を言う。
知らない人にまで賛同を得られる
ように、政党活動と一緒にやらな
ければいけない。それが一番大事。
— 政党活動と一緒に、ですか？

近藤 聞いている人は何党の政策
かわからないから。

また後援会に入ってもらうには
どうしたらいいかを考える。いく
ら立派な政策を「立て板に水」と
やったってねエ、馴染みがないと
駄目。ことばを交わしたり、一緒
に写真撮ったり、そういうことを
やって馴染みをこしらえておかな
いと。

議員活動を継続するためには、
いかにすれば自分に投票してくれ
るか、常に考えている。そのテク
ニックはいろいろありますけれど、
それを日常的に行うためには必ず
金がいる。
街頭で演説するにも幟旗立てにや
いかん。マイク代、燃料代がある。
自動車代もある。

— でも議員になった人が、選挙
でもないのに幟旗立てて、私はど
この誰某でございますなんて、あ
まり走り回ってないじゃないです

か。

近藤 イヤ、走ってます。そりゃ
走ってますよオ、目にみえないと
こで。人間は一つの目と耳しかな
いから知るよしもない。それをし
ないと継続当選はできない。選挙
区で辻説法やっている人も多いで
す。

商店街のオジさん連中を集めて
飲み屋へも連れて行く。そういう
ことにお金がいるんですよ。膨大
な金だ。

旅行会

近藤 具体的な日常生活としてわ
れわれがやってきたのは、旅行会。
名前を覚えてもらわないかんから、
議員の名前をとって「〇〇旅行
会」、「〇友会」とか、親しみや
すい名前をつける。

費用は月掛け、若しくは年三回
掛けとか四半期分を集める。チラ
シをこしらえる。世話人ができる。
最初と呼び水で、世話人が調査に
行く。何時間かかるか、ホテル代
はいくらか。

— 失礼ですけど、世話人って、
どんな人です？
近藤 日常活動の中で、この人は
情熱家だな、この人は活発な町内

活動をやっているな、この人は遺
族会で頑張っているな、この人は
若いけれども老人会の会長をやっ
ているな、というような人を調べ
ておく。

— それ、地方ですよ。東京じゃ、
とても…。

近藤 イヤ、三日あったら東京で
も後援会委員の十人や十五人はこ
しらえてあげますよ、私。

— どういうふうにするんですか？
近藤 「こんにちは」で行くんで
す。じつはこないだいい青年が政治
をやりたいんです、と。〇〇町の
〇〇で、学校はどこを出ていて、
おじいちゃんや区長をとった人
です。あるいは、この地域の社
会福祉協議会々々長をしていまし
た。その孫が立派なんですわ、ちょっ
とおつきあいしてくれませんか、
と。

— それは知ってらっしゃる方？

近藤 全然知らない人。ピンポー
ンと鳴らして個別訪問する。三割
ぐらいは成功しますよ。

世話人の場合も、じつは後援会
の旅行会をこしらえたいんや、と。
どこがいいか悪いかご意見を拝聴
したい。日程を決めますのでご参
加いただけませんかでしょうかとい
って、募る。

議員になる以上は人脈をつくら
にゃいけませんから、こういうこ
とは最低やらなきゃいけない。そ
して旅行に行ったら、当人が酒つ
ぎをする。せめて握手する。

例えば旅行地を決めて、予備調

査のホテルへ行って交渉する場合、
千人連れていくと言ったらね、ホ
テルは社長以下ねじりハチマキで、
すごいサービスです。五十人分は
無料にしてくれます。その分は宿
代から飲み代まで、全部タダ。お
土産まで持たせてくれる。もちろ
ん契約が前提。

「歩」が「金」になる

— でもどうやって千人も集める
んですか？

近藤 世話人がおるから。一つの
バスに四十五〜五十人乗りますか
ら、その人たちが車両長になる。

— 世話人の人たちが、どうい
う人なんです？ そんなに集め
られる人って。

近藤 普通の人ですよ。自営業と
か、うどん屋のオッサンもいるし、
いろいろおる。

人間でね、生きていく過程で、
最低五人は友達を持っています。
どんな人でも。町内会長とか名の
つく人だったら、五十人は知って
いる。

また、安い。大勢で行くから安
い。ホテルはね、もう言いなりに
なる。だからね、誰でもけっこう
行けるんですよ。これは買収でも
違反でも、何でもない。

— そうですね。ただ身銭きって
遊んでいるだけ、っていうか…。

近藤 そうしてね、われわれがやっ
たのは、旅行のコースに必ず神社
仏閣を入れる。

世話やくの、好きなんですよ、

人間は。「〇〇長」なんて言われたことのない人が車両長で行くんですから。五十人もの連絡簿を作ったのなんか、生まれて初めて。将棋でいうたら「歩」が「金」になる。

選挙も一緒よ。ふだん「金」になつたらん人が「金」になつたらもう命がけ。選挙も一緒。私、この心理学を会得してますからね。

—それ、男でしょ。

近藤 いや、女もよ。女でも演説をやりまくる。もう二回目、三回目になるとマイク持って離さない。車両長は、その時は大将ですよ。班長も、日常生活の中で、みんなが「班長さん」と言うてくれる。自然にそういう人が出来てきます。

車両長に代議士から感謝状出してもいいですよ。応接間に色紙と写真と一緒に飾つてある。それはもう、威張つてやりますよ。一〇〇パーセントではないけど、八〇パーセントは間違いない。

これをキチッとやれば完全に組織化できる。

選挙のとき、一番安くて金がかからないようにしないと。パーティも開かずにはやられてきたんですから。本当に真面目に、社会党の先生以下の議員活動をしてきましたからね。

私が組織したのは七千人。十四回行きました。ま、これは一例です。

—ふう〜ん。しつこいようですけれど、サラリーマンの社会人でも

—そうですか？

近藤 そうですよ。サラリーマンだって「長」がつくまで、なかなか時間がかかります。五十人以上の中小企業だったら、係長になるまで十年かかりますから。

買収は いっさいしない

近藤 さきほど言った政治活動、後援会拡大などの日常活動の他に、政治家は私利私欲、売名のために蓄財をする。

だってね、代議士になって三年もしたらベンツに乗ってる。運転手つきで七百万もするベンツ乗りつけてくる。なんですか、これ。蓄財の例ですよ。

うちの森下の例をあげたらね、割れた靴はいて、半皮貼ってる。森下の家は材木屋ですよ。生活には困らんけど、パーティも開かずに一生懸命やった。そういう感覚で代議士生活二十数年やってきました。国会議員の鑑かたみです。そのかわり飛行機代も車代も、私の分は私が全部都合した。それぐらい代議士は節約せなイカンのですよ。

だから、旅行会をつくったわけ。選挙に金がかからないようにするために。

—ちょっと待ってください。選挙に金を使わないために旅行会を？

近藤 そう。

—いざというときに、旅行会の人たちが票を入れてくれるから金がかからない、っていう意味なん

元衆議院議員・厚生大臣森下元晴氏秘書。
日本モンゴル文化交流協会理事。



—ですか？

近藤 うん。金をもっていかなかつたって、一生懸命やってくれるから。

—そうでないと、買収しなきゃならない。

近藤 (買収は) いっさいしない。買収はしないから、みんなで楽しくやって人脈をつくっておく。

そのために旅行会をする。

—その旅行会で代議士が、儲けるってことはないんですか？

近藤 いっさい、ない。どんなことをしたら投票してくれるか。ただそれだけ。

みなさん、どんな人に投票しますか？

—まず真面目な話をしなきゃいかん。行動も真面目でないといかんね。あるいは病気になる人はアカ

—んわね。そういうすべてが整ったなかで政治活動を真面目にやれば、かかる金はしだいに少なくなってくる。

—だけでも選挙で、いっさい買収費を使わなくても年間最低数千円はいられますよ。電話代とか、それも一億近い金がある。

—わかります、それは。でも、その旅行会に連れて行かれたから、票を入れるとなると、いつも同じ人に投票することになりますよね。

近藤 そうよ。それが一般にいう基礎票。アンタだってそうなりま

—すよ、よほど偏屈でないかぎり。そのかわり意見も言う。旅行会のバスの中で質問もする。悪いところがあったら返事はできませんよ、先生方は。とにかく身を律しとか

—ないイカン。大衆のために返事ので

きる代議士じゃなきゃイカンわけです。清潔こそ一番です。だから、ご飯を一緒に食べるとか、そういうつきあいに政治家はお金がいります。

宗教団体の会合に顔を出す

近藤 旅行会以外にも、政治活動として宗教団体の会合にひんぱんに顔を出す。

宗教団体というのは、これほど多いものはない。日本中に二万五千、宗教法人があるんですから。商店街を歩いていて、ア、ここは天理教だ、生長の家だ、神社庁だ、いつくらかもある。日本の宗教は一つではないから、「八百万」だから違和感がない。

最近の宗教はね、人が来てくれたらえらい喜んでる。

—政治家でも？

近藤 ああ。一般の人もね、誰が来ても喜ぶ。お賽銭払ってくれるし。

例えばある日、議員バッジをパチッと光らして、地域の八幡さん、氏神さんとこへ黙ってお参りに行く。氏神さんのお祭りに信者が五十人寄ってますわね。「こんにちは。お参りにきました」と言うて、十円玉を十枚でもガチャラガチャラと放り込む。そして、うやうやしくパンパンと手を叩いたら、「まあ先生、お上がり下さい」となる。これは間違いない。ほっときませんよ。

—はあ。

近藤 今度行事があったら呼ぼうと、そう思いますよ、瞬間的に。

これは間違いないから。

次の日の晩は生長の家でお話があると。静かに、バッジをつけて、つけとかならんからね、受け付けて「今日はありがたいお話を伺いに参りました」。そして必ず「先生、どうぞッ!」。

後で「〇〇先生が現在来てくれております」。信者がね、「あ、私が今聞いた話を代議士も一緒に聞いていたんか」と、こうなりま。それで名刺をダァッと配る。これは選挙のとき、役立つ。

私なんか家へ帰ったらレター作戦。全部に礼状を書く。だいたい月に三百通は手紙を出します。もう癖になってる。手紙が届いたら、



え・西田淑子

一回会ったのが二回か三回ぐらい会ったように向こうは受け取ります。

私はカメラ、いつも持ち歩いてる。写真も現像してパンパン送る。私はカメラ代によっぽどお金を使ってる。

—それは森下さんのためになさるのですか？ それともご自分のため？

近藤 両方。代議士の秘書をやっているときは私はあんまり表に立ちませんでしたが、今は私だけ。何しろ、森下代議士が生まれたのは、ご本人も極めて賢い人で努力家ですが、近藤シナリオですから。旅行会も全部、私のシナリオです。

地方選は物入り

近藤 議員活動に必要なだいたいの金額をいいますとね、スタンダードな形をいいますと、まず議員会館、国から与えられる事務所に七十万円くらいいらすわ。

—ひと月？

近藤 うん。それから、東京で事務員がいる。お茶代、お菓子代がある。

—ちょっとゴメンナサイ。議員会館は無料でしょう。

近藤 そうよ、そこに国から給料の出る公設秘書以外に、一人ないし二人の女の子がいる。一人というの少ないほうです。それらの費用も含めて議員会館の直接費が七十万くらい。今日の金でね。

そして半数以上の議員は別に東

京事務所を持っている。家賃はだいたい三十万くらい、事務員もいるし、通信費、雑費、清掃費がいる。これが月に百五十万くらいかかる。

それと党費。これは政党と県連、二つが原則。だいたい十万くらい。

次に冠婚葬祭、祝賀関係がある。これがバカにならないですよ。同窓会があるとな、代議士なんかにな

とったら呼びたいんです、みんな。小、中、高、大と四つある。必ず上席に座らせられる。そういうつきあいで二十万、計上しています。

また地方選がある。選挙区内の市長、町村長、いろいろ知り合いがいる。その人たちが立候補するときに、事務所開きや公示日の決起集会、当選したら「当選バンザイ」で、三回は電報と酒代がある。最低条件は電報と「祈必勝」やけど、つきあいの濃厚な人にはお包みがある。

—これはたいしたことなさそうですね。

近藤 とんでもない。地方選のときは電報代だけで五十万かかります。

自分の選挙区だけで市町村が五十〜六十はある。一つの市町村で四十人として、その半数には電報を打たなあかん。なんぼになりま。その人たちに三回ずつ打ってお酒もつけたら、ものすごい金額になる。それをしなかつたら大変ですよ。つむじまげて。

選挙事務所に行ったら、電報が全部貼ってある。〇〇代議士、〇〇代議士、って。私は〇〇先生から電報も来るし、お酒も来る。お酒なんて飲まないでちゃんと飾ってある。ときには「応援したってくれよ」と電話で頼んであげる。虎の威を借りてるわけ。そういう人でないと票がこない。

そのための費用として計上しているのが二十万。まあ、選挙のない月もありますからね。自分の選挙区以外でもね、うちの村で取れたカキですって送ってきたり、陳情のときに鱒寿司ですって富山県から持ってきたり、いろいろする。そしたら、その知事が選挙に出るいうたら、人情としてちょっとの心遣いはしないと可哀相。いわんや大臣なんかになったら、もう全国から陳情が来る。

後援会活動は 草の根運動

近藤 次にかかるのが後援会活動費。これがまた大きい。まず一月に一回か、二カ月に一回機関紙をつくる。これだっ配ってもらう人には多少の心付けがいるし、印刷費がいる。

国会報告を中心に地域で取材をするし、写真も入れる。だいたい七〜八万人が対象ですわ。票を入れてもらうときは七〜八万人以上の人に頼みますから、その半分は印刷したいね。二人に一枚、三人

一枚はいくようにしないと。あの人が来たのに私には来ない、となるから。些細なことだけど。でも後援会ってのはお金を取ってるでしょ。その中から経費は出ないんですか？

近藤 会費をみんながくれると思ったら大間違い。会費をくれるような後援会はほとんどありません。そんな幹部だけ。末端の会員はくれません。だから経費を計上しとかなあかん。そして任期の間は緻密に後援会会報を出す。

でも、後援会に入らって意思表示はいつするんですか？

近藤 入会申込書がある。パンフレットに、議員の顔があって世話人の名前が書いてあって、入会申込書がついている。一人の世話人が百人は会員を入れてる。

私の知り合いの衆議院議員なんか、そんなこと全然してませんよ。

近藤 それをやったかないと次の選挙で負けます。いざというとき、誰に頼むんですか。縁もない人が電話で急に頼んできたって駄目。それは電話をかけるほうの自己満足だけ。

うちにもよく電話がかかってくるけど断っちゃう。

近藤 そりゃそうですよ。ご縁があったればこそ頼みを聞いてくれる。でも会ったことがなくても三回も丁寧に頼んできたら、ほな家には三票あるから一票あげよかと、家族会議で決まるかもわからん。



—家族会議でねえ…。

近藤 それをやったないと次の選挙では絶対あがれません。田中角栄さんなんか、本当に草の根までガンガンやっている。党の中で出世するにも継続当選しないと。継続性のない議員なんか党はアテにしません。

選挙対策費として 年間五千万！

近藤 次にかかるのが旅費と衣服代。旅費、これは馬鹿にならないですよ。遠方を走り回りますからね、日本中飛びますから。

—だと議員になると、JRか飛行機の無料パスが出るでしょ。

近藤 議員は出るけど秘書は出ません。それに今は飛行機よ。JRなんて、そんな時間のかかるの、使ってません。新幹線で遠くへ行ったら向こうで一泊せないかん。それならよけいに金がかかるし時間もかかる。ほとんど飛行機オンリー。

服かてね、前に着て行ったのをまた着るわけにはいきません。この頃は安くなりました。ヨレヨレ

のも着れんから、まあ、ちょっとした五〜六万のものを着る。ネクタイだって二千円ではあきません。だから旅費、衣服費ちょっと多めに計上して三十万くらい。

その次、選挙対策費。これはまあ大きな金がある。年間五千万。—エーッ！

近藤 今まで、解散まで二年平均ですからね。三年のときもあるけど、一年八カ月のときもある。で、年に五千万は蓄財しとかないかん。蓄財じゃない、蓄積だ。

—これは党からくれないんですか？

近藤 くれるけれども、どれだけ党が出してくれるか。

今までの話をまとめると、議員活動に必要な金額はだいたい月に五百万から五百三十万。その上、選挙対策費として、年間五千万の貯金をしとかなイカン。

(つづく)

これからまだまだ続く秘書談義。議員たちが国会の中で、党の中でいかに生き残っていくか。次回は、党の中で出世する方法など、その奮闘ぶりをご紹介します。お楽しみに。

まとめ・宮前 和

去年の年の暮、渋谷のあるレストランで、衆議院選挙へ出馬希望の女性、Aさんを囲む会が開かれた。

会を設定したのは、Aさんの知人のBさん。パリパリのキャリア・ウーマンである。「Aさんを応援しようと思うのよ。とくに肩入れしているわけじゃないけどさあ、ともかく女性議員が増えるのはいいと思って」

Bさんからこんなふうな声をかけられて集まったのは全部で八、九人。編集者、記者、主婦の雑多な集まりだった。

☆

Aさんを囲んで話がはずみ、夜もふけて会がお開きというころ、誰が会計を持つかで悶着が起こった。

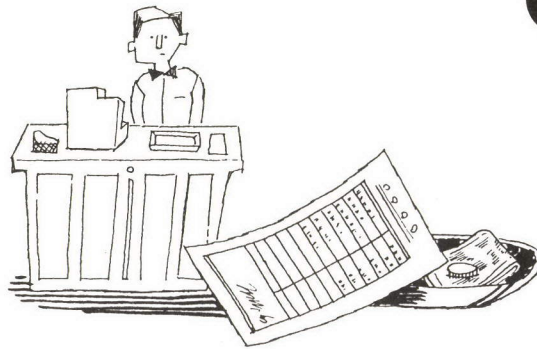
Aさんは一足先に帰っていたが、残っていた秘書がいう。「勘定は私が。Aからお金、預かっていますから」

「それはダメ。割勘にしなければ」といったのは編集者のCさん。

世話人のBさんは迷っていた。Bさんが声をかけたことにはなっていたが、実のところ、最初に会の設定を持ちかけたのはAさん。Bさんの心には、忙しいなかを集まってくれた人たちに自腹を切らしては悪いなあ、という思いが潜んでいた。

“腐敗”の芽はどこにでも。

百億、十億はおろか、一億の金にだって縁のない私たち庶民は、ゼネコンと政治家の癒着や腐敗の話を聞くにつけ、フンガイする。しかし私たち庶民自身、ほんとうに怒る資格があるのだろうか。



結局、それじゃせて半分

は払わせて、とAさんの秘書が折れて、勘定の半分をAさんの秘書が、あとの半分を割勘にしてお開きになった。さてこれでよかったのかどうか？

あなたならどうする？

☆

「腐敗」の芽はいたるところ

にある。

この日、Aさんの秘書も、Bさんも、Cさんも、みんなが間違ってしまったのだ。Aさん支援のために集まった会であっても、Aさんにとえ半額でも金を払わしてはいけないのである。自分の食べた分は、断固、自分で全額はらわなければいけない。

ところがこれがピンとこない常識が世の中にはびこっている。

人を招待して何かを頼むとき、頼む側がおごるのは当然だ、と多くの人が考えるからなのだ。

そして日本では候補者は「頼む人」、選挙民は「頼まれる人」。こう考えると「頼む

人」がお礼をするのは当然、となつて、結局は買収も供応も自然なことになり、何の罪悪感にも結びつかなくなる。現在はびこっているのがこの「常識」である。

過ちの第一は、選挙にまつわるもろもろの行為を「頼まれごと」ととらえる感覚。国会で決められることが、私たちの生活に深く結びついていることが分かっていないから、「頼まれる」などとのんきなことが言えるのである。選挙は私たちが候補者を品定めし、選び出す行為、私たち自身のために行う権利としての行為なのだ。

ところで、おごられても票を入れなければ買収にならないもん、いいじゃん、という人がいる。しかしそんなことを考えている人は、そうやって議員に金を使わせる行為が、議員の「腐敗」を招く原因になるということをおぼろげに。そしておごられて票を入れるのならば、それはまぎれもなく「買収」である。

この夜のレストランの支払いを、たとえ半額でもAさんの秘書に払わせた女たちの感覚は、一万円で票を売る田舎の老女と根っここのところではながっている……。 私たちの民主主義は未だにそれほど未成熟だったのだ。

小池百合子さん

鈴木 由美子



女性の起用に積極的な日本新党から、九二年参議院選挙に出馬して当選、翌九三年には衆議院に転じ兵庫二区から当選。連立政権の成立とともに総務政務次官になる。つい最近までテレビ東京のキャスターとして視聴者に語りかけていたことを思えば、急な階段を駆けのぼるような二年間を過ごしてきた。

いまは、国や地方の女性議員の比率を高めるため、すべての政党に働きかけようとしているところ。政策が決定されるどんな場にも一定以上の比率の女性がいる状況をつくるために、クォーター制の実現には強い熱意を持つ。しかし、マドンナと呼ばれた一群の女性議員とは意識的に一線を画している。

「私はね、女だからって考えないで、国はどうあるべきか、社会は、経済は、政治は、っていう大きな観点でものを

見ます。活発な経済活動が行われることで全体がうるおうことが大事なのです」という。カイロ大学留学中、オイルショックが起きた。石油の供給が断たれてはとパニック状態になって日本の政治家たちがやってきた。パレスチナ問題のイロハも知らず、ただ石油を売ってくださいと土下座するような日本の外交姿勢が情けなかった。

どんなときも国際的な視野を忘れずに。そういう小池さんの現在最大のテーマは「規制緩和」である。

ニュースでよく耳にする割に、素人にはつかまえてどこのない言葉なのだが、わかりやすくいうと？

「OLさんたちが、シャネルの口紅をシンガポールやハワイでこんなに安く買ったとしゃべっていて、なぜ日本では安く買えないのか考えようという。日本では高くて当たり前とはじめから信じこんでいて、どうして消費者といえるのか……」

日本に外国製品を輸入するとき、いろいろな規制がある。もし、外国で一〇〇〇円の商品が日本で五〇〇〇円で売られているとしたら、差額四〇〇〇円がどこから出ているのかを調べる。安全性や環境問題、国際条約にかかわる部分

でやむを得ず価格を高くするのはしかたがないが、無駄な規制や、高すぎる中間マーシンの部分は省くことができる。経済流通をシェイプアップすれば、一五〇〇円で売ることにも可能になるだろう。

日本には複雑な流通機構のおかげで生活している人も多いが、中間マーシンの失業対策になるというような、後ろ向きな発想ではない。

日本だけが奥様に高い物価、高い給料でぬくぬくコタツに入っているのは、国際的な競争力がなくなる。日本の航空会社が日本人スタッフを一人雇う予算でタイ人八人を雇うことができるほどの差になっているではないか、と説く。

「こういう話はきつとあまり歓迎されないと思いますが……」と小池さんの言う通り、私たち日本人は毎年春闘をしては賃上げを、首切りには反対をという発想に慣れている。外国製品、国産品を含め、商品価格に含まれる無駄を省いて低価格を実現し、生活を実質的に豊かにするという発想の積極性を認めつつも、不安を抱く。

無駄を省いたために不要になった労働力は、どこに吸収されるのか。日本もまた失業率の高い社会になるのではな

いか。競争原理、原価引下げだけを目的とする経済活動は、アメリカ型の弱肉強食の社会をもたらさないだろうか。

「変わるこのことのコワさはある。アメリカなど失業率が二〇パーセントだといいますが、そこを乗り越えてやってきているんです。年齢的に、たとえばソロバンはできてもコンピューターは無理という人たちをどう支えていくかということが課題になります」

一国の経済を新しい発想で組みかえ、国際経済の中で繁栄させるのは容易なことではないだろう。模様の箱庭に中では川の流れを変えることに成功しても、現実世界が大洪水になる場合もある。

「どの方向にイエス、ノーといおうと、楽な道なんてない。選んだそれぞれの道に厳しさがあるんです」

小池さんは人々の不安や疑問を予想しつつも、「規制緩和」に賭ける思いを訴えようとしている。

小池百合子（衆議院議員、日本新党）一九五二年兵庫県生まれ。カイロ大学卒業。テレビ東京キャスターを経て、一九九二年参議院議員に当選。九三年兵庫二区から衆議院議員に当選。細川政権成立とともに総務政務次官となる。

中嶋里美さん



所沢市議会議員の中嶋里美さん、と聞けば、ひょっとして十年くらい前にウーマンリブ漫才をやった高校の先生じゃない？と気づく人がいるに違いない。小柄な後輩女教師と組んで、絵に描いたようなノッポとチビの漫才コンビだった。

「旅館に着いたらすぐ、男風呂の戸をガラガラッと開けてのぞきこんで、女風呂より大きくて立派だったら、主人に

文句を言うのよ！」入浴中の男どもに悲鳴を上げさせそうな迫力が、観客をドッと笑わせた。女性差別をこんなに面白く表現したひとはいなかった。

ラーメンのコマーシャル「私つくる人、僕食べる人」への異議申立てに始まり、女性差別をなくすさまざまな運動に関わってきた。最近やっと実現した家庭科の男女共修も中嶋さんたちの長い運動の

成果である。

定年まで続けるつもりだった教師をやめたのは、一九八五年にケニアで開かれた世界女性会議への参加が契機だった。経済的に豊かな日本の女性議員の比率が、世界でピリから数えたほうが早い。女性議員を増やそうと固く決意して帰国し、八七年の統一地方選では多くの女性候補たちを支援して走り回った。ところが過労で目をいたため入院して手術を受けることになり、今後は本当にしたいことに絞って仕事をしようと退職した。

各地の女性に政治への進出をすすめるなら、自分自身も議員活動をしていたほうが説得力がある。九一年には所沢市議選に出馬。利益誘導型の政治風土で男女平等の理念を高くかかげる中嶋候補は落選確実と見られていたが、フタを開けたら当選していた。女性差別をなくせと正面からいう政治家を待望していた女性票が集まったのだ。

所沢市議会では、二人の先輩女性市議と一緒に「女性・さわの会」の会派を形成している。会派をつくれれば、議事運営委員会や代表者会議に出席することができ、議会全体を見通した活動ができる。同じ議会に女性の視点を持った仲間がいるのが心強い。

中嶋さんの、市議三年間の成果は？

まず所沢市役所では、女性だけのお茶くみが廃止された。中嶋さんの質問に、企画部長が「お茶くみは各自がやるべきものです」と明確に答弁し、方向が定まった。生涯学習の場として市民大学を作り、以前から計画のあった女性センターの完成を早めさせた。市立の小中学校で男女児の名をミックスした出席簿をつくるための研究会もすでに発足している。

非嫡出子の住民票記載差別をなくす方策を、正規職員としてのホームヘルパーの増員を、体罰で苦しむ子のために教育オンブズマン制度の導入を、と中嶋さんの議会での質問はエネルギーに続く。

自治体に、理念で突き進む議員がいる意味は大きい。市役所にお勤めしている何子ちゃんはお茶くみがなくなってセイセイしたそうよ、この子が入学するときには男女混ざったアイウエオ順の名簿になってるかも、と話題になる。テレビや新聞で一部の男女平等論者が叫んでいるように思えた主張が、自然な形でわが町の暮らしに溶けこんでいく。

所沢市議会で屈指の働き者であるかたわら、全国の女性議員を増やす活動のほうも忙しい。中嶋さんは九二年に結

成されたフェミニスト議員連盟の代表となった。

女性議員ゼロの自治体をなくしたい。女性議員の比率を当面三〇%にまで引上げたい。岡山県津山市へ、愛知県尾西市へとどこにでも講演に出かけていき、女性候補を擁立するため応援をする。

中嶋さんが歩いたあとには、タケノコが生えるように女性候補の人材が生まれ出てくる。「政治に参加する女性は、魅力的な人間にならなくては。これからの若い人達があんな風になりたい、と思うような女性のモデルが身近にいるってとても大切なこと」

ガチガチの論文や肩いからせた演説でなく、視聴覚に訴える多様な表現手段を考えていきたいという。

自宅ではおつれあいとの二人暮らし。教育者の彼は家事を「七割」負担してくれている。

性別分業と闘って生きてきた中嶋さんは、いま「全国区の市会議員」として存分に働ける環境にいる。

中嶋里美（埼玉県所沢市議会議員）一九三九年生まれ。高校の英語教師在任中、男女平等を目指す運動に参加。九年所沢市議会議員選挙に当選。フェミニスト議員連盟代表。

やさしい「税金」の話

その一

庭山慶一郎さんに聞く

不況、不況というけれど、あるべき姿にもどっただけでは？ という声をよそに、政府は景気刺激策として「所得税減税」を打ち出した。減税の真のねらいはどこにあるのか？ 結局誰がほんとにトクをし、誰がソンをするのか？

税金のとりかたは三つある

この国税に地方税を合わせて合計90兆円、国民一人あたり75万円くらいの税金をどういう方法でとるか。税金をとる方法は三つあります。

「税金」について話す前に、ちょっと国の財政について説明しましょう。国家の歳入・歳出というとなにやらむずかしく聞こえますが、ひとことでいえば国の家計です。国の収入、つまり歳入は、「租税収入」「国有財産からの収入」「国債発行による収入」この三つから成り立っています。

このなかでもっとも比率の高いのが「租税収入」です。今年の予算を例にとれば、73兆円の予算のうち、租税収入が54兆、残りが「国有財産からの収入」と、借金である「国債の発行による収入」。つまり税金が歳入の約73%を占めています。

一つめは「所得に注目して課税する」方法、二つめが「使った代金に課税する」方法、三つめが「財産にたいして課税する」方法です。所得があれば税金をばらう能力がありますから、それを認識してとる、これが税金の本筋です。

でも、それだけではとりそこなう。調べてもとりもれがある。

とりもれがあっても、その人たちが物を買うだろう。それなら消費したとき税金がとれるようにしておけば、脱税した分もとれる、これが消費税ですね。

もしそれも脱税すれば、財産がふえるだろうから財産に課税する。そんなわけで、

「所得課税」「消費課税」「財産課税」の三つが大きな税金のとりかたなんです。

さっきから、「とる・とる」といっていますが、課税当局は「とる」といわずに「いただく」といっています。でもこれは納税者にたいするおべっか。自分たちにはいただいている気持ちなんかありません。ホンネは「とる」なんです。

高額所得者が

いいだした

「所得税減税」
ところで現在、日本では、所得課税に重点をおいた徴税方法になっています。

所得税は累進課税だから所得の多い人からはたくさん、少ない人からは少しだけとることができるとはありますが、消費課税は使った分にかかる大衆課税です。

しかし人間が消費する量は、収入に比例するわけじゃない。たとえば月給が三倍になっただけからといってお酒を三倍飲む、車を三台買うわけではないでしょう。

ですから消費課税にたよると弱い者に負担がかかり過ぎます。それで日本はずっと所得課税が中心だったんです。

ところがいま、所得課税が高すぎるという議論があります。しかし日本の所得税は先進五カ国と比べて、そんなに高くないんですよ。むしろ1千万円以下なら税率はかなり低いです。3千万円から5千万円になると、日本は極端に高くなりますが、それでもいいじゃないかという議論もあるわけです。

それならなぜ所得税減税がいいだされたかという、年間所得が2千万円くらいになると急に税金が高くなってきます。

政府職員の給料は年々ベータアップしていますから、2千万円に近づいて税金がたかさんかかりはじめた。自分たちが払う段になって、これはおかしい、ということになったんですね。

一方、政府の相手である財界や上場企業の部長も、みなさん年収は2千万円以上はあ



る。そこで話が一致して、「所得税を減税しましょう」となったわけだ。「しかし財源はございませんよ。消費税を増税しますが、どうぞご了承ください」と話を持っていったのが大蔵省。「そうですか、いやあ、我々も所得税がたいへんですから」と財界。

大蔵省は消費税をあげたいがために所得税減税を持ち出したというのが、本当のところでしょう。それくらいの作戦を大蔵省はやりますから。

「景気回復のために所得税を減税する」といっていますが、所得税を減税しても消費するのは半分で、後の半分は貯蓄に回りますから、所得税減税が景気活性化に対するインパクトは弱いですね。

景気活性化のためなら、むしろ消費税率を下げるべきです。それなのに消費を抑制することになる消費税率を上げるのはおかしいでしょう。

大蔵省というものはいまだかつて景気を刺激するために所得税を減税する、などといったことがないんです。

所得税減税は消費税率を上げたいがため、としか思えませんね。考え方がまことに不純というか、素直じゃありません。

無理をおして成立させた消費税をさらにあげるのはどうか？

消費税というのは、わずかに3%で7兆円くらいの収入になる。1%あたり2兆3千億円の収入になる税なんです。だから細川さんがいったように7%になれば、9兆円くらいの増収になるわけです。それをもう大蔵省はしたくてしようがないんです。税金とることばかり考えてますからね。もっとも大蔵省が税をとることを忘れたら、ネズミをとるのを忘れたネコみたいなものですが。

その大蔵省内で、消費税率を7%にしても103円がたった107円になるだけでどう変わるかわからないか、というような論がありますが、こんな荒っぽいいかたは困るんです。103円が107円になるじゃなく、3円が7円になるんだから二倍以上です。郵便料金だって41円が50円になった。これは二割です。だから値上げをする場合、一度にやるのは二割からせいぜい三割まで。もし最後の策として、やるなら5%くらいが限度でしょうね、現状では。なぜかといいますと、現在

の消費税を成立させるためにずいぶん無理をしたんです。税率が大きくなるとその際の無理、矛盾もまた大きくなる。予測されずからね。

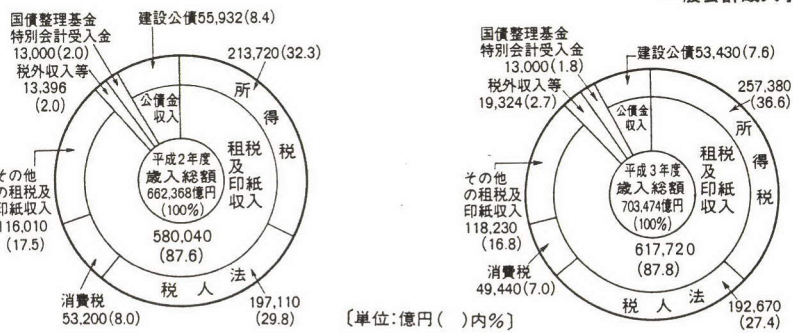
成立のときどんな無理をしたかといいますと、年商4億円までの人には「あまり細かいことをいけませんよ」、年商3千万円までなら「消費税を納めなくていいですよ」といった。これはね、脱税してもうるさくいいませんよ。だから消費税を作ったらあなたがたはトクでしょう。そういうことを暗にほめかして、アメをなめさせて賛成してくださいといったむきがあるんです。

それが今、いわれている「益税」。業者が消費者から受け取った消費税を国に納めないでフトコロへ入れている。所得税では「九・六・四」つまり所得税のとりもれがかねてから問題になっていて、それが消費税なら取れるというのには間違い。現実には決してそうじゃありません。

弱いものが税金を負担する

ところで「消費税法」には、消費者が税金を払えとはどこにも書いてない。これはモノを売る事業者が払う税金なん

一般会計歳入予算の内訳



です。ところがやはり導入のときのいきさつがあって、事業者には「消費税を自分で払う必要はないんですよ。100円のものでも103円で売られたらどうですか。あなたになにも負担はありませんよ」といい、消費者には「100円のものを買われるときに3円くらいは税金として納めてください」としたほうが、事

業者をなだめるのにいいという方針だったんです。

消費税は実際に納税の義務のある人とそれを負担している人が違います。それを誰が負担するかは各々の力関係で決まってくるんです。

例えば好景気のときは103円でもほとんど売れた商品が、不景気になると100円でしか売れない、ということになってきているでしょう。専門用語では「転嫁」とか「シフト」といいますが、景気のいいときは、小売店は消費者にすべて税金をシフトしていたのが、できなくなってきたんですね。

税金というものは結局力関係の弱いものが負担する、ババをひくことになっているんです。

政府は誰が税を負担するかということについて、なんら関心を持っていません。誰でもいいからオレに○兆円納めてくれればいい。消費税は税をとる側のそういう姿勢がはっきり分かる税金です。

まとめ・たまきくみ

にわやま・けいいちろう
元大蔵省銀行局検査部長
元日本住宅金融会社取締役
社長・現相談役

読む BOOK !?

竹村正義著
小さくとも
キラリと光る国
日本

和田 好子



●ポコアポコ氏の生活と意見

“少しづつ”をイタリア語ではポコアポコ、というのだと聞いて、何と楽しいおもしろい言語だろうと笑ってしまっただことがある。この本を読み終えたとき、ゆくりなく私の頭に浮かんだのはこのポコアポコ、という言葉であった。ムーミンパパと呼ばれる武村氏ののんびりムードの外貌が、このリズムカルなイタリア語を連想させたのだと思う。一九三四年生れ、今年還暦を迎える武村氏は、東大出の官僚上がり、三十六歳で滋賀県八日市市の市長に当選して以来、政治の世界に入った人だ。滋賀県知事を三期十二年務めて衆議院議員に進出する。議員になった彼は、金の要ることに驚き、その金を集めたいへんさに閉口した。

この本の前半は市長以来の政治生活の回想談で、学生時代や自治省時代のこともし語られている。自分史みたいなもので、政策論は後半になるのであるが、この前半で彼の人柄が分かり、後半を読み解くカギになるのはよい。ただベタに政策を並べた本より理解が深まる。衆議院議員になって、大企業サラリーマン社長みたいな知事時代とこと変わり、小企業のオーナー社長のように金繰りに日夜苦しみ、下げたくない頭も下げねばならなかった彼は、当然の成り行きとして政治改革に強い関心を抱く。彼が政治家になったそもその動機は、金儲けがしたいからでも、親の地盤がもったいないからでもない。名前の正義どおり正しいことがしたかったのだ、知事になったときは前職の金権体質を批判して当選したのである。それが危ない橋をおっかなびっくり渡るようになって、こんな大金の要るしくみを変えたいも

のだと思っただのはむりもなかった。

金のかかるのに困ったのは彼ばかりではなく、自民党には「政治改革委員会」というのがあったが、そこで五年半も事務局長を務めた。こんなに熱心な人は外になかったという。

しかし政策、行政が利権がらみで行なわれるしくみで、得をする政治家は多数派だ。サッチャー女史が言ったように「泥棒にナフをなわせるのが政治改革」なのである。

事の進まないのにだんだん失望した武村氏は、最近の政治腐敗事件の続発、自民党の実権を握る金丸信氏の逮捕にまで至って、同志を結集し新党の結成に踏み切った。

●正義の実現はポコアポコ

彼が正義を目指す人であるのは疑いない。東大出のエリートといっても、政治への関心は左翼学生運動に始まってお

り、大学出るまで八年もかかった。

要するに出世と金儲けが人生の目的ではない人ではあるだろう。

さて問題は、目指す正義をどうやって実現するつもりなのかということだ。

彼は官僚として実務にたずさわり、市長や知事の経験も長いせいか、なかなか現実的で漸進主義である。ユートピア政治研究会というものを作って、理想は高く掲げ、政治家が理想を失ったらだめだと言っているが、市長選は初め革新系、二期目からはオール与党体制、国会では自民、という経歴を見ると、何かが実行できるポストを獲得するねらいがあったのだろう。ヤミクモに理想を追っかけるより、政治家としてはベターであろう、が……。

とても資本主義の枠内で、ことに最近の国際化自由化の嵐の中では、解決が容易につくまいと思われる問題を「理想」として掲げていることである。ポコアポコとやって行けばできるというのだから、その方法が何か小さすぎる。ポラントニアの植林で国際貢献とか、農業問題にしても、農業人口の減少、農産物自由化は止むなしとしながら、田んぼと農家を失くすなと言う。素人でも心情的に思い付きそうな方法が並んでいて、こんなことで解決できるなら、誰も苦労はしやしないという感じだ。正しい理念を持っていても、実現の方法を持たず、妥協を重ねていけば、結局は体制に流されるのではないかという危惧を感じる。

この人のポコアポコを生かす道は、もっと身近なことに限る方がよいのではないか。好漢の健闘を祈る。

女の学校

アイムパーソナルカレッジ

カルチャースクールの時代は終わった
これからは主婦のビジネススクールの時代

「自分を変える」

学校。

「自分が変わってしまいました。もの見方が広くなって、もう、もとの自分には戻れない、という感じ……」

卒業生は一人ならず、こんな感想を口にする。

自分が変わる。こんな「おそろしい」学校は、いったい何を教えているのか。



長井和子（ながい かずこ）

アイムパーソナルカレッジ校長。広告制作会社(株)ケイ・オフ代表。11年間の専業主婦のあと、フリーのコピーライターとして広告業界に飛びこむ。5年目で会社設立。40歳の時、東京コピーライターズクラブ新人賞受賞。42歳でアイムパーソナルカレッジを設立。

「コメ問題」

という宿題、

デイスコパーティ

という

卒業製作。

アイムの授業のなかには、「マスコミの政治的中立について」だの、「コメ問題を考える」だの、おそろしくハ

の半分が女性であることが自然でふつうなことなのだ、という感覚を身につけて卒業してほしいと思っています」と、代表の長井和子さん。
いま、社会が求めているものは何だろう、どんなイベントなら、企業がスポンサーになってくれるだろう。仕掛ける立場に立って、初めて見える社会の仕組み。
アイムは、いつも与えられる側にいる主婦を、与える側



卒業生が企画したシルバーファッションショー。サンシャインシティプリンスホテルにて

でも何をしたらいいのかわからない。

オープンしたのは五年前。テニスやグルメに明け暮れる日常がまだ主婦たちのステータスであり得た時代だった。後半の人生を「余暇」として、あれこれ時間をつぶして

いってみれば「アイム」は、体力と、気力と、ありあまる時間とを、どこに振り向けようかと試行錯誤をくり返す主婦のために生まれた「学校」。

何かしたい、

でも何をしたらいいのかわからない。

「行動すること」。それがアイムのテーマ。どんな有難いお話を、講演会のはしごをしながらきいたところで、自分から行動することを覚えなければ、何ひとつ変わらない。

企画、討論、取材、製作、実行……「承り学習」の講座にはまったくユニークな学習が、ここにはある。

ドなものもある。四、五人のグループに分かれてデイスカッションした後、代表者が自分たちの意見を総括する場面では、参加者の能力の高さに息をのむ。

「アイムは政治を学ぶ場ではないけれど、少なくとも人口の半分が女性なら、国会議員

にまわしてくれる学校なのだ。九四年三月から、第五期生を募集。一年コースは、ライター、デザイン、経営企画の三コース。五月連休あけからスタート。週一回、三時間。研修制度や人材登録制度もある。問い合わせ03-54101

5464。

▼今年最初の号をお届けします。この三か月、ほんとうにさまざまな政治ドラマがありました。細川・小沢連合が、これからの日本をどんな方向に連れていくのか、しっかりと見つけていきたいと思っています。

▼この冊子は原則として年間予約購読、郵送で販売しております。購読ご希望の方は、奥付にある編集部にご電話で購読をお申し込みください。一冊ご希望の場合、年間四冊分二二〇〇円、送料四冊分三六〇円、合計一五六〇円です。発行日は三、六、九、十二月のそれぞれ二十四日です。

▼ところで「ファム・ポリテイク」は直送のため、事務処理にかなりの手間と時間がかかり、しかも一冊の単価があまりにも安いので、採算がとれずに苦慮しております。そこでたいへんに勝手なお願いで恐縮なのですが、できれば身近なお友達にもおすすめてくださり、複数冊をとっていただけるとほんとうに助かります。五冊以上まとめてくださると、送料はサービスさせていただきますので、くわしくは編集部にご電話でお問い合わせください。もちろん一冊でも三冊でも大喜びです。どうぞよろしくお申し込み申し上げます。

▼ご意見・ご批判、また企画のご提案など、読者からのおたよりをお待ちしております。

編集部

女の政治口口誌

一 一月から三月まで

▼この三か月の最大の出来事は、何といっても「政治改革法案」の成立であった。ここできま、改めてこの経過を振り返ってみたい。

▼昨年秋ごろから小選挙区・比例代表並立制にかんして「多くの死に票が生じて民意を反映せず、小政党ははじきとばされ、大政党に有利になる」「先例をみれば、小選挙区制は腐敗防止に必ずしも役に立たない」など、その危険性を指摘する声が大きくなってきた。

これにたいし、不思議なことに「推進派」からの有効な反駁はほとんどなく、聞こえてくるのは、「せつかく六年も時間をかけたのに」とか「予算審議はどうして」

れる「など」という声ばかり。

そうした状況のなかで、年末から年初にかけて、マスコミにも「腐敗防止のための政治資金規正法の成立を先行させてはどうか」という主張が浮上り始めた。この時点で首相は、「政治改革四法案の一括審議以外は考えられない」と、きっぱりそれをはねつけた。

さて法案は参議院で否決され、その後の膠着状態のなかで細川・河野会談が行われ、首相は自民党案を「まるのみ」にして法案は成立の運びとなった。もちろん「政治浄化」の見地からみれば、法案の内容は大幅に後退している。

▼「お前たちが反対したから、こんなことになったんだ」

批判と嘲笑の声が起った。その

れらは、参議院で法案に反対票を投じた社会党の「造反議員」に向けられていた。彼らが参議院で否決に回らなければ、首相が自民党案「まるのみ」に追いこまれることもなかったに、というわけである。マスコミも、文化人も、社会

党支持の人々でさえも、ひとしなみに同じ態度をとった。

▼しかし人々が忘れていたことがあった。自民党案「まるのみ」は首相にとつては既定の事実だったのである。参議院本会議での採決の前、首相は「反対派」議員たちに電話をかけた後、「参議院で法案が否決されると、自民党案を

まるのみにせざるを得なくなる。何とか青票を投じないよう」に説得に努めていたのだ。

これは巧妙な戦法であった。相手がどうしてもAを取ると言い張るならば、自分はしかたなくBを取るよ、と宣言してしまえば、その選択の責任を巧みに相手に転嫁できる。しかも二者択一をふりかざすことで、他にも選択肢が存在することを忘れさせることができる(所得税減税と消費税増税の問題にも同じ方法が使われている)。

▼首相に他の選択肢がなかったわけではない。例えば土井提案は十分に現実的な、すぐれた解決策の一つであった。にもかかわらずそれに一顧も与えず、首相が「まるのみ」を選択したのは、それが首相にとつて好ましい選択であったからである。

事実を細かく検討していくと、私たちは否応なく首相のホンネにたどりつく。

首相の「政治改革」の主たる目的は「腐敗防止」にはない。

このホンネは、「政治資金規正法」の先行単独審議をはっきりと拒否したとき、衣の下からチラリと光った。そしてその後、国会の委員会での「政治資金規正法」が受けた「修正」によってより明らかに姿を現している。

三分の二以下におさえる」という取り決めを行っている。これは金持ちの党がトクをし、貧乏な党がソクをする可能性をふくむ、驚くべき修正であった。

▼政府与党、とくに首相の率いる「貧乏な」日本新党までがこの修正の賛成にまわったということは与党としての日本新党が、新生党・公明党などの豊富な資金源をもつ「金持党」と一体化しつつあることを示している。

こうして「政治改革法案」のうち「政治浄化」に関する部分は骨抜きにされ、「小選挙区・比例代表並立制」は手つかずのまま成立した。これは自民党を飛び出して「政治改革」実現に熱意を燃やした新生党の小沢一郎氏が求めたものである。「小選挙区制」によって小政党や無所属議員を排除し、

二大政党によって自らの好む政治を効率的に行う、それが小沢氏の最終目標であった。氏の戦略はすでに着々と成功しつつある。

氏の意図する政治は、日本をどの方向に連れていくのだろうか? ▼マスコミの「意見」でなく、報道される「事実」をたどっていくと、政治のアマに過ぎない女たちにも、見えてくるものはたくさんある。女たちよ、目をそらさずに現実を見つめつけよう! (K)